【地域と関わる活動の報告】

高知大学による魚梁瀬森林鉄道に関する調査について

岩 佐 光 広

よろしくお願いいたします。高知大学人文学部の岩佐光広と申します。今ご紹介いただいたように、冒頭の小幡先生からのお話にもありましたが、高知大学人文学部が中心となりまして、魚梁瀬森林鉄道に関する聞き取り調査をさせていただいております。その調査内容の紹介までは時間の都合上できないので、どういうコンセプトで調査をやっているかという辺りを中心にお話ししたいと思います。

まず、ここまで清岡さんをはじめ、お話がありましたが、この魚梁瀬の森林鉄道をめぐって、これまでさまざまな取り組みがされてきました。その取り組みというのは本当に幅広いものですが、やはり、森林鉄道の遺構の保存と活用ということが中心に行われてきたと思います。もちろん、そのことが地元の方や組織が主体となって取り組んできて、重要な成果を挙げてきました。

それを踏まえて、これから取り組んでいく必要のあることとして、今度は、モノとして残っているものだけではなくて、森林鉄道をめぐる「記憶」の記録と活用ということが大事であろうと考えています。森林鉄道と関わりながら暮らしてきた人たちの経験と記憶については、まだまだ多くが記録されていません。また、残ってはいる、記録になっているとしても、まだまだ整理がされていなくて、共有できないような状態にある。こういったものをセットでちゃんと整理して、保存と活用ができるといいね、ということを考えております。

ちなみに『「りんてつ」私の記憶』（魚梁瀬森林鉄道保存クラブ、リーブル出版、2014年）という本をご覧になったことのある方がいると思いますが、この『「りんてつ」私の記憶』、それは魚梁瀬森林鉄道保存クラブのときに出ているものです。これなどは、いろいろな方のいろいろな立場からの経験の語りが記録されていまして、こういったものを、もっと豊富に記録と活用できたらいいなと考えています。

さて、私たちの調査が始まったきっかけは、小幡先生の冒頭の話にもありましたが、保存会などのこういった活動を踏まえて、高知大の人文学部のほうに調査協力があった

高知人文社会科学研究第４号(2017)

ことでした。それを受けて、人文学部の小幡、吉尾、後藤、岩佐で研究チームを立ち上げました。日本史から東洋史、地理学から、私は文化人類学というのを専門にしていますが、こういった分野違い、ちょっと視点が異なる先生が集まってやってみようと。そしてもう１人、現地で活動されている、今日ご発表いただいた赤池さんにも加わっていただいて、高知大学の側ではこういうメンバーでチームを組むことにしました。

そして、2015年度から、地域の側と公共団体、そして大学が連携して聞き取り調査をやっていこうということで、今日、ご報告いただいた清岡さんと中村さんに全面的に協力をいただきながら、聞き取り調査を実施しています。

この調査の目的ですが、森林鉄道のあった時代の「日々の暮らし」というものに注目しています。ここのところを少し探ってみたいというのが主目的になっております。当時の暮らしぶりというのは今日、いろいろな形で展示されています。今日、会場に写真を持って来ていただいた方もいらっしゃると思いますが、その当時の暮らしぶりというのは、例えば写真なんかでうかがい知ることはできます。しかしながら、もっといろいろな側面があると思うのですが、分からないままになっていると思うのです。それはその時代を生きた方の記憶に残っているだけで、なかなか見えてこないということがあります。

この調査では、この時代を生きた方々の、それぞれの経験というものを大事にしてみたい。同じ場所に住んでいても、立場であったり、仕事であったり、あるいは性別だったり、世代であったり、そういうのが違うと、同じ場所で同じものを見ていても、捉え方がずいぶんと違うと思うのです。こういったものを一つの見方だけで、特定の誰かから見たものだけではなくて、その時代を生きたいろいろな方々の、それぞれの立場から経験されていること、そういった記憶を大切にしながら、それをつむぎ合わせていくことで、この地域で営まれてきた日々の暮らしぶりというのを描き出してみたい。それを継承が可能な形で記録していきたい、と考えています。

この「日々の暮らし」という言葉をあえて使っているのは、森林鉄道の話になると、もう言わずもがなで林業と鉄道業務というのがやはり中心になってきてしまっていて、僕らも、ともするとここに目がいきがちだからです。実際に話を聞いてみると、それらにとどまらない話が豊富に出てきます。

例えばそれこそ、その当時、どんなものを食べていたのか、どんな服を着ていたのか、あるいはどんな家に住んでいたのか、屋根がこんなに変わってるとかといった、衣食住

の話であったり。

あるいは生業活動ですね。林業をやっていても木材以外のものも森では豊富に取れます。そういったものが実際どんなふうに取られて利用されていたのかであったり。

あるいは酔ったときのお話を聞いていて、すごく僕は興味を持っていまして。先ほど杣はあまりお酒を飲まなかったという話があるのですが、缶詰、どんなものを食べてつまみにしていたか、なんていう話も出てきます。あと山の神事、山の神さまの祝い事なんていうのも、ぜひお聞きしたいと思っています。

移動と交流のお話というのも、いろいろな形で出てきていると思うのです。例えばここから外に出て行った方もいれば、その当時、こっちに働きに来ていた方というのも多くいらっしゃる。そういう移動と交流があれば当然、そこには色恋沙汰と結婚なんていうことも起こってくると思いますので、こういったことも興味があります。

モノと技術でいくと、今日、杣が使うのこぎりなんか置いてありますが、あれはどうやって使うのかと思いませんでしたか。あんなにでかいのこぎりをどうやって使うのか。つまりモノだけが残っていても、そのモノをどういうふうに身体を使って使うかというのも、一緒に残っていないと分からなくなってしまうのです。やはりこういうお話なんかも一緒にぜひ聞きたい。

こういう形で、森林鉄道というものに注目はしているのですが、そこだけではなくて、もう少し幅を持たせた「地域というものの歴史」を捉える。そういった立場からお話を聞いてみたいと考えています。

実際の聞き取り調査としては、中村・清岡両氏と共に高知大学のメンバーも参加して実施しています。１～２時間ほどお話しいただいて、その内容は映像と音声で記録を取っています。現在、林業や鉄道業務に関わっていた方を中心に、10名ほどの方にお話をお伺いしました。こういったものをこれからどんどん増やしていくとともに、こうやって記録を取ったものをどういうふうに整理して活用していくかというのが、これからの課題にもなっていくと思います。

最後に、今後の取り組みです。やはり、先ほどの中村さんのお話にもありましたが、しっかりこういった資料を集めて、さらに集めるだけではなくてそれをどういうふうに捉えたらいいのか、どういうふうに整理したらいいのか、そういったことも含めてしっかりやっていく必要があるだろうと。

もう一つなのですが、こういうお話をすると、ここに来て今、いろいろな形でこうやっ

てお会いしているのに、どうしても昔のことばかり気になってしまいます。でも、今どうやって暮らしていて、例えば昔あったことが今どうつながっているのか、今どうやって暮らしているのか。やはり地域の歴史を踏まえて、この地域の「今」というのをちゃんと考えてみたい。そう考えると、まさに今やっているこの活動自体が歴史の重要な一面になっていくと思いますので、こういった機会もちゃんと記録を取っていく必要がありますし、こういったものもちゃんと見えるようにしていきたいと思っています。

『観光文化と地元学』（井口貢編、古今書院、2011年）という本の中に面白い話がいくつか出ていまして、この本のモットーが「無い物ねだりからあるもの探しへ」というもので、そうした転換が必要だという話をしているのです。その背景には、観光というものが多様化していると。そのときに、いろいろな表現があるのですが、「学習型観光」とか、ミドルステイ、ロングステイで何カ月もいるとか。あるいは１日日帰りではなくて、例えば３日とか４日、１週間。これぐらいの滞在としての観光というのもある、という話が出てきます。

そのときにやはり必要になってくるのは、行って、見て、「ああ、楽しかった」というので終わり、ということではやはり味気がない。これはこれでとても大事だと思うのですが、もう少し、その場に立ち止まって、何かを学んで、そしてもう１回自分で考えてみる。そういった、少しとどまって考えるような観光というのができないかなと思っています。

そういうときに重要になってくるのが、やはり先ほどの中村さんのお話にもあったように、しっかりとした調査研究と資料を提示するということだと思っております。そういうところでこそ、私たちが関われることも多くあると思います。それに対して皆さんのほうから、それがどういうふうに受け止められるのか、もっとこうしたいのではないかということは、一緒に協力して考えていければいいなと思っています。

私たち自身も調査に来て、これでやったから終わりという、どこか終わりのある話ではなくて、やはり継続して、立ち止まって、しっかり続けて、学んで、考えるということを続けていける。そういった、観光だけではなくて、私たちの調査もできればいいなと思っています。

いずれにせよこの調査は、2015年、去年始まったばかりで、まだまだこれからです。私自身、出身は遠くの福島なのですが、この間、聞き取りをしているなかで、「ボッチリ作らなければいけない」と言っているのですが、「ボッチリ」とはどういう意味かなと思いながら聞いていました。やはり土佐弁なんかもしっかり学んでやっていかなければい

けないという意味では、私にとってはまだまだこれからの活動だと思っています。

なかなか内容には立ち入れなかったのですが、こういった活動をご理解いただいて、ご協力いただければと思っています。また、今日に限らず、まだまだ来ますので、ぜひそときはよろしくお願いいたします。以上になります。

（いわさ　みつひろ　高知大学准教授）